令和３年度　学校自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標 （学校ビジョン）	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1　基礎・基本の定着と学力の向上 2　基本的生活習慣の確立 3　地域連携と特色ある教育活動 4　進路意識の向上と進路保障 5　コミュニケーション能力の向上 6　業務改善の取り組み

年　度　当　初						評　価　結　果（中間）		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
1	基礎・基本の定着と学力の向上	・ 全体的な基礎学力の向上と学習意欲の向上 （進路・教務）	・基礎力診断テストの評価（GTZ）において、下位層の生徒が少なくなく固定化している。上位層の生徒は年度をとおして大きな変化がみられなかった。	・指標として、基礎力診断テスト（1、2年生）におけるD3の生徒が45%を切り、上位層の成績が安定し、全体の学力が向上している。	・家庭学習時間調査を年2回、基礎力診断テストを年3回学期始めに実施し、One week 問題集、弱点克服プリント等を活用して基礎学力の定着を図る。 ・朝学習・基礎学力テストを検証し、また基礎学力テストの表彰制度を継続するなど、実施方法の改善に努める。	・D3の割合　４月→９月 【１年生】55.3%→50.7% 【２年生】54.3%→44.1% ・２年生上位層は大学一般入試で合格が目指せるＢ３以上の生徒数は、４月からほとんど変化が見られない。	C	・One week 問題集、弱点克服プリント等を活用して基礎学力の定着を図る。 ・朝学習・基礎学力テストを検証し、また基礎学力テストの表彰制度を継続するなど、実施方法を改善する。
		・ 授業改革の取組の推進 （教務）	・各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいる。協同学習の手法による授業改革が徐々に実践されつつある。	全ての教科・科目でコロナ感染症対策をしつつ、協同学習の学習内容、実施方法を検討して行う。	・全員が協同学習をテーマとした公開授業を行い、授業改革に取り組む。 ・コロナ感染症対策を考慮し、各科・各教科（2教科程度）ごとに小グループに分けて公開授業を実施する。	・教職員アンケート（７月実施）からも授業改革に対する意識は高まっているが、協同学習をテーマとした、公開授業は進んでいない。	D	・協同学習をテーマとした研究会を11月に行い、公開授業を２月下旬までに全員が実施できるようにする。
		・ 成績上位者へのサポート体制の充実 （進路）	・3年生で農業系大学進学を希望する生徒5名を含む進学希望者が約30名おり、大学進学研修プログラムの参加案内や個別指導を開始している。 ・１・２年生については、担当者はまだ決定していない。	・3年生進学希望者の進路希望が実現されている。 ・１・２年生の進学希望者に対する継続的な学習支援体制が実現されている。	・進学希望者への指導体制を確立するとともに、進学希望者(成績上位者)に対する個別指導を実施する。 ・２年生のコーディネーターを配置し、進学希望者に対して早期に個別の指導体制を構築する。	・現在３年生進学希望者に対する個別指導を実施中。 ・教職員を対象とした小論文指導研修会を企画し、小論文・志望理由書作成の指導力向上につなげた。	B	・進学希望者に対する個別指導を継続する。 ・10月に進路希望調査を実施し、１・２年生の進路希望を把握する。
2	基本的生活習慣の確立	・ 挨拶指導の徹底と頭髪・服装規定を守る取組の推進 （生徒指導）	・分離礼がかなり浸透してきた。 ・8割強の生徒が頭髪・服装規定を守っている。2割の生徒は毎月の服装検査後に改善をしている。	・全員が常に分離礼による挨拶ができる。 ・常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過ごしている。	・全教職員の共通理解のもと、授業、清掃、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。 ・毎月の服装検査の実施と事後指導の徹底。 ・担任、学年団、学科、生徒指導部の連携を密し、段階的・組織的指導を行う。	・自発的にあいさつをする生徒が増加した。 ・分離礼は浸透してきた。 ・４月から９月まで６回の服装検査で12.5%の生徒へ服装改善の文書を出した。昨年の15.5%を３ポイント下回った。	B	・あらゆる場面での、あいさつ、分離礼の徹底をする。 ・情報を共有し、学年団、学科、分掌の連携を深めた指導を行い、生徒の自律心の向上を図る。 ・服装検査基準の徹底と日常的な声掛けを、全職員で行う。
		・ 教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進 （環境保健）	・自己理解・他者理解の意識が進んでいない生徒に友人とのトラブルが発生しやすい傾向がある。 ・QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類される領域に学校生活に対する意欲の低い生徒が見られる。	・自己理解・他者理解が進み、より良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が７月に比べ１２月が上昇している。 ・QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。	・新入生全員面談と2，3年生の面談、職員による生徒観察をとおして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。 ・校内職員研修会を実施し、QU等を活用した教師の生徒対応のスキルをアップさせる。	・１年生全員面談を実施し、入学後の様子を観察したり、学校生活に対する意欲や要望を把握した。また、教育相談担当や教育相談員との生徒面談は必要に応じて随時実施した。 ・第１回QUを６月に実施し、８月下旬にその結果をもとに職員研修を行い、今後の生徒理解へ繋げた。	B	・学校生活に対する意欲や要望を把握するため、教育相談担当、教育相談員、担任と連携を図り、情報を共有しながら必要な生徒の面談を継続する。 ・第２回QUを10月に実施する。 ・QUの結果を受けて職員研修を行い生徒対応のスキルアップの継続を図り、全職員が生徒支援を進めていく。
		・ 明るく活発な中での規律ある寮教育の推進 （寮）	・寮内の美化に努める生徒は多いが、自室の整理整頓を苦手とする者が多い。 ・日課に自習時間を設けているが、成績の向上に自信を持てない生徒がいる。 ・寮生会活動に責任感を持って取り組む一方、運営の方法や手順がわからず、教員に頼りきりになる場面がある。	・日頃から各自の机上およびその周辺を片付け、自己管理能力が向上している。 ・基礎学力テストの成績が毎回6割以上となっていることで、日頃の学習や進路実現に自信を持って取り組んでいる。 ・行事の企画段階から教員と意見を交換し、自主運営ができている。	・環境委員会と生活委員会の巡回に加え、舎監から個別に指導・助言する。 ・教科と連携し、課題プリントを作成し実施する。 ・リーダーや役割分担を明確にし、自主運営のための助言やサポートを行う。	・再三の声掛けと確認を行っていることもあり、整理整頓を心掛ける者が徐々に増えているが、本棚に、過去の不要なプリントをため込んでいたり、空のペットボトルを処分せず放置している者もいる。また、洗濯物を畳んで収納することが苦手な者もいる。 ・課題プリントが、事前学習に早くからとりかかるきっかけとなっている。また、テキストを持ち帰っていない者にとっては、無勉強での受験を防ぐこととなっている。	B	・整理整頓への具体的な声掛けと再確認を継続して行う。 ・課題プリントに取り組んだ後、提出させることで取り組み状況を把握する。
		・ 各科の特色づくりと魅力の発信 （農場）	・生物科は特色の一つである乗馬交流会が開催できなかったが、本県唯一の畜産に関する学習は基礎基本を重視しながら継続できている。また、地域への普及を目指す青パパイヤ栽培は特色ある取組として認知されてきた。 ・食品科は米の食味鑑定会での入賞、いのこつラーメンの開発、スマート農業の実践、学校内外における販売実習などが特色ある取組として認知度も高い。 ・環境科はＪＲ倉吉駅の草花装飾や草花交流などが特色ある取組として継続している。これらの成果がテレビ、新聞などマスコミに多数取り上げられ、生徒の達成感や自己肯定感につながっている。	・地域に定着した取組を継続しながらも時代のニーズにマッチングした特色ある取組、例えばSDGsを意識した活動を実践している。 ・調査・分析を中心として、より科学性を高め、地域農業への貢献を視野に入れたプロジェクトに取り組んでいる。 ・昨年同様特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信することによって、生徒の自己肯定感や達成感がより一層高まる。 ・ウィズコロナ時代にも対応した、新しい様式の農業教育を実践している。	・各科の特性に基づいた課題研究を推進し、特色ある取組を地域振興につなげる。 ・地域貢献に加えて環境問題などグローカルな視点を持った課題研究を実践する。 ・SDGsについての教職員の意識および知識を向上させる。 ・ウィズコロナ時代を想定し、オンライン学習などを取り入れた新しい農業教育のあり方を模索する。	・地域の環境問題（竹害）の解決、竹の有効利用を目指した２年目の研究「竹炭の活用による養豚における肉質・環境改善プロジェクト」を県教委主催の「とっとり夢プロジェクト」に応募し、採用された。 ・地域への普及を目指す青パパイヤプロジェクトは、昨年以上の苗の供給（約1,200本）と生産者数（約60軒）の増加が見られた。外部機関との連携を取りながら特産品開発も進めている。	B	・科学的裏付けをしながらプロジェクトを進めていくために関係機関との連携に一層取り組む。 ・特色ある取組をマスコミや地域へ情報提供・発信することにより、生徒の自己肯定感や達成感をより一層高めていく。 ・教職員、生徒ともにSDGsを意識した取組を身近なところから進めていく。

令和３年度　学校自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標 （学校ビジョン）	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1　基礎・基本の定着と学力の向上 2　基本的生活習慣の確立 3　地域連携と特色ある教育活動 4　進路意識の向上と進路保障 5　コミュニケーション能力の向上 6　業務改善の取り組み

年　度　当　初					評　価　結　果（中間）		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
3	地域連携と特色ある教育活動	・ 農業の６次産業化の取組の推進 （農場）	・県版HACCP取得しているウインナーソーセージの食肉加工実習を中心に行うことによって生徒の衛生意識が高まっている。 ・タマネギ、ジャガイモ、ニンジン、シロウリなど原材料を生物科で生産し、食品科での加工実習や製造会社への納品を行い、学科間連携を実施している。 ・食品衛生コンサルタントを交えた研修を積み上げ、食品安全マネジメント規格（JFS-B）の取得を目指している。	・本校の特産品（米、新甘泉梨、青パパイヤ）を原材料とした校内６次産業化が進み新商品の開発が進んでいる。 ・鳥取県版HACCPに加え、より学校教育現場へ適合する食品安全マネジメント規格（JFS-B）を取得し、安心・安全な加工食品を生産することで生徒の衛生意識が向上している。	・施設自体で複数の製品について認証される食品安全マネジメント規格（JFS-B）の取得のために食品衛生コンサルタントとの連携を密にする。 ・学科間の職員の意思疎通や生徒同士の連携に努め、校内６次産業化を目指した取り組みを進める。	・オンラインによって県外の食品衛生コンサルタントから講習を受けるなど食品安全マネジメント規格（JFS-B）の取得認証に向けた取り組みを進めている。 ・イノシシカレー、奈良漬け、福神漬けの原材料を生物科で生産し、食品科での加工実習やイノシシカレー製造会社への納品を行った。また、台風被害に遭った新甘泉梨の有効利用に向けた加工に取り組んでいる。	B	・食品衛生コンサルタントと情報交換を密にしながら、今年度中のJFS-Bの取得認証を目指す。 ・農業の６次産業化の手法について座学、実習の両面から生徒に指導する。 ・青パパイヤの加工も視野に入れ、引き続き学科間連携を継続しながら来年度の原材料の作付け計画を進める。
		・ 学校からの情報発信の推進とＰＴＡ活動の活性化 （教育支援）	・学校の様子を家庭・地域へ情報発信しているが、十分に伝わっているとは言い難い。 ・ＰＴＡ活動への参加者は、総会への参加者数の推移から考えると一定数ある。	・ホームページ（HP）を積極的に更新し、行事の様子など本校の活動が広く認知されている。 ・保護者等が積極的にPTA行事に参加している。	・教育支援部が毎週１件以上（年間３５回以上）の記事をHPに掲載する。 ・部活動の様子を部顧問がHPにアップする。 ・保護者への情報伝達手段として「まちcomiメール」を活用する。 ・HP掲載方法に関する校内研修会を開催する。	・報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼を行った。 ・教育支援部が行ったＨＰの更新は17件（全体では57件。約30%）（昨年同期は17件。全体では55件。31%）であった。 ・保護者宛文書は生徒を通して、幹部役員宛文書は郵送で配付した。どちらの文書も「まちcomiメール」でも行った。 ・文書・メールに加えて、保護者の参加促進のために、役員同士で直接の声かけを行っている。	B	・引き続き、報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼を行う。 ・教育支援部が中心となり、ＨＰに校内の出来事を週１度以上掲載・更新するよう努める。 ・ＰＴＡ会員への案内は、メール配信サービスを利用する。 ・月間行事予定表を学校ＨＰに掲載する。
4	進路意識の向上と進路保障	・早期からの進路意識の啓発と進路指導の充実 （進路）	・昨年度の進路決定率は100%であった。進路選択の見極めの不十分な生徒が就職に苦戦した。 ・２・３年生にも進路希望先が未定の生徒が一定数存在する。	・早期からの計画的な準備により進路目標を達成し、進路決定率を100%にする。 ・進路ガイダンス等をとおして、生徒の進路意識の高揚を図り、年度末には２年生の進路希望が確定できるような進路指導を行う。	・早期に適切な進路決定がなされるよう、引き続きガイダンス、個人面談、個別面接指導等に力を入れると同時に、進路行事やＬＨＲなど見直しを行う。 ・早期の定着指導、職場開拓を実施し、進路先の開拓を進める。 ・地元の大学見学等を実施し、進路意識の高揚につなげる。	・６月の進路ガイダンスは、コロナ対応で外部に依頼できなかったため学校独自に実施するなど、状況に応じて行事を行った。 ・1、2年生の進学希望者を対象とした鳥大農学部見学会を実施し、進路意識の高揚を図った。	B	・ガイダンス、個人面談、個別面接指導等に力を入れる。 ・コロナ禍においても生徒の進路意識向上に向けて進路行事やLHRの工夫・充実に取り組む。 ・進路先の新規開拓を進める。
		・ 資格取得者増加に向けた取組の推進 （農場）	・農業学習の到達度の指標となるFFJ級位検定の合格者は、初級位に４７名（合格率４６%）、中級位２９名（同２５%）、上級位１８名（同８２%）である。上級位検定以外の合格者数、率ともに前年を下回っている。 ・多くの資格検定が中止や延期になり、各種資格検定の合格者数延べ人数は263名で昨年の324名を下回っている。 ・本県初となるアグリマイスタープラチナ1名、ゴールド３名、シルバー４名、農業技術検定２級1名、測量士補１名の認定など、難易度の高い資格の合格者が見られる。	・FFJ検定初級の合格率60%以上、中級の合格率40%以上、上級位検定合格者数は25名以上、合格率85%以上。 ・各種資格検定の合格者数がのべ３００名以上であり、アグリマイスタープラチナ認定者、農業技術検定２級、測量士補などの合格者数が昨年以上である。	・FFJ検定の意義をことあるごとに説明し、生徒のモチベーションを高める努力を続ける。また級位検定の意義や学習方法などを教員が一丸となって指導する。 ・級位検定の実施日を定期考査と別日にしたり、寮生は自習時間を級位検定の事前学習に充てるなど、集中して勉強できる日程を確保する。 ・実物鑑定資料の作成と活用を進める。 ・農業技術検定問題集やテキストを活用して出題傾向を分析、把握した上で教科内においても学習指導をする	・夏休み明けの第１回FFJ検定では初級位に全学年合わせて33名（昨年：41名）、中級位合格者は17名（昨年：21名）であり、特に初級の合格者数が激減している。さらには、１年生の初級合格者数22名（昨年：31名）、合格率29%（昨年：42%）であり、１年生の成績が振るわない。 ・アグリマイスター認定者はプラチナ１名、シルバー２名が前期で認定された。特にプラチナが前期申請で認定されたことは特筆できる。	C	・第２回FFJ級位検定（11月16日）の合格者を増やすため、特に１年生に対して級位検定の意義や学習方法、意識付けを一層進めていく。上級位検定についてはすでに中級合格の生徒に対する指導を早期に開始する。 ・12月に実施される後期農業技術検定の受検者に対する学習指導を各専門教員が中心になって行う。
		・ 農業や地域を支える人材の育成 （農場）	・スーパー農林水産業士に4期生５名が認定され、4年連続で1名鳥取大学へ進学した。また本校として久しぶりに公立鳥取環境大学へ1名進学した。現在、５名が5期生の認定を目指している。 ・就農促進研修会に１年生５名（7）、２年生６名（9）名、３年生７名（5）の合計18名が参加した。( )内は昨年の人数。 ・就農する生徒は昨年に比べ減少したが、一定数存在している。 ・昨年に比べ農業関連の進学・就職割合（38.6%、32名/83名）が微増した。（R1：35.6%、26名/73名）	・スーパー農林水産業士5期生が誕生し、鳥取大学農学部へ5年連続進学する。また、公立鳥取環境大学への進学者がいる。 ・スーパー農林水産業士のしくみ、利点や、各学科の取組を今まで以上に県内外の中学校へ情報発信することで入学希望者が増える。	・スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを確実に実施し、就農意欲喚起に関わる行事に積極的に参加させるとともに、新たにスーパー農林水産業士を目指す生徒を増やす。 ・４年生大学への進学希望者の基礎学力を高める取組を継続し、特にプロジェクト研究に重点をおいて主体的に取り組ませる。 ・各学科の魅力ある取組をSNSを利用して県内外に発信し、中学生および保護者の興味・関心をもたせる。	・スーパー農林水産業士育成プログラムを着実に実施し、現在の候補生徒は10名である。 ・就農促進研修会は20名の参加があり、スーパー梨団地や和牛肥育農家などの見学研修と農業大学校における農業者とのディスカッションが行われた。	B	・スーパー農林水産業士育成の認定希望者のうち、大学進学を目指す生徒について、食の６次産業化プロデューサー育成講座レベル２の認定を進める。 ・農業自営を目指す生徒を増やすために、農業の楽しさ、やりがいを感じさせる授業、実習を一層実践し、特に１年生に対してはスーパー農林水産業士の意義や利点などを伝える。
		・ 生徒会活動と部活動の活性化 （生徒会）	・生徒会活動に主体的に関わろうとする生徒が増えている。一方で生徒会活動に無関心な生徒も見受けられる。 ・年間を通して活動している部活動が限られている。	・生徒会執行部の具体的な活動を通して、全生徒に生徒会活動の意義を認識させる。 ・中国大会と同程度の大会に出場する部が、文化系体育系を合わせて３部以上となる。	・生徒会執行部が中心となって、生徒の意見を反映した新たな活動に取り組み、その経過・結果を全校生徒に分かりやすく示す。 ・全校集会、表彰式、壮行会、一斉部会等を充実させることにより、部活動に対する意識の高揚を図る。	・生徒の意見を反映した取組として新型コロナ感染症対策を徹底して秋季球技大会を実施した。 ・部活動では活発に活動する部が増え大会で成果を上げている。	C	・倉農祭などを生徒たちが主体となって運営するなど当事者意識を持たせることで、生徒会活動の重要性を認識させる。 ・後期も表彰式、壮行会を行い、部活動に対する意識の高揚を図る。

令和３年度　学校自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標 （学校ビジョン）	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1　基礎・基本の定着と学力の向上 2　基本的生活習慣の確立 3　地域連携と特色ある教育活動 4　進路意識の向上と進路保障 5　コミュニケーション能力の向上 6　業務改善の取り組み

年　度　当　初						評　価　結　果（中間）		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
5	コミュニケーション能力の向上	・ 人権に関する知的理解と人権感覚の育成 （人権）	・他者との関係を築くのが苦手な生徒がみられる。 ・自己表現ならびにコミュニケーション能力を向上させる取組を行っているが、十分とはいえない。	・自らが社会的な存在であり、そのことに今まで無意識であった自らの現実と、それに伴う言動を振り返ることができるようになる。 ・コミュニケーションが相手の主張する権利を知る方法であるのと同時に、自分の権利を相手に伝える方法であることを知り、必要なコミュニケーション能力を身に付けている。	・特別活動をとおして、互いの意思疎通を図り、集団の目標と各個人の思いをコミュニケーションをとりながら整合性を図ることができるように授業環境を設定する。 ・少人数グループでの学習の機会を通して、言葉や行動に関して自分の「普通」が相手の「普通」ではないことを知り、物事を遂行するためにはどのようなコミュニケーションが必要になるのかを考えることができる内容を設定する。	・気の合う４～５人のグループだけで集まり、他の人とはコミュニケーションを取ろうとしない姿が散見される。多様な価値観を認め合う状態になるよう自身の成長を促す取組が必要である。	C	・LHRや日々の教育活動の中で、いじめや差別など人権に関わる問題に対して、早期に感知できる意識を持たせる。また、自分の発言内容が、周囲にどのような影響を与えるのかを考えさせる。
		・ 幼保小中学校との連携や地域とのつながりの推進 （農場）	・コロナ禍のため外部との交流学習は中止となるものが多かった。 ・中学生との交流や農業体験学習では、本校生徒が主体性をもって指導することができた。 ・生産物販売実習はコロナ感染症対策を講じて開催し、学校理解と地域貢献につながった。	・知識や技術を身につけ、異世代と交流したり指導することで自己肯定感や自信につながっている。 ・交流事業の企画、運営などを生徒が主体となって取り組み、コミュニケーション能力が高まっている。 ・幼保小中学校との交流により、農業の楽しさややりがいを実感させ、将来の生徒募集につながる。	・交流学習をコロナ感染症対策を取りながら実施するとともに、PDCAサイクルを意識した取組にする。 ・学校開放講座は、ニーズに合った内容を検討し、指導する生徒の意識や技術を高め、主体となる学びの場面を確保する。	・６月、７月の「のうこう市場」は新型コロナ感染防止対策を徹底して開催し、地域の方々に喜ばれた。 ・JA鳥取中央主催のあぐりキッズスクールを本校を会場に実施し、学びの成果を確認することができた。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から学校開放講座は中止とした。	B	・生徒のコミュニケーション能力育成のためにも、後期は可能な限り交流学習の開催とその実施方法を検討する。 ・幼保小中学校との農業体験学習は感染症対策を徹底し可能な限り実施する。
6	業務改善の取り組み	・長時間勤務者の解消 ・業務の効率化 （教頭）	・時間外業務は、教員で月平均1.3時間（18.9⇒17.6）、事務が月平均2.7時間（11.2⇒8.5）減じている。一方で時間外業務の目標時間を毎月のように超えている教員もいる。	・日々の勤怠管理や週休日振替等が徹底されており、月当たりの時間外業務が、平成29年度比で25％以上削減できている。	・週休日振替・勤務の割振の徹底、年休、夏季休暇等の取得を推奨する。また、業務に偏りが生じないよう、分散化を図ることを組織的に取り組む。	・週休日振替や勤務の割振りは概ね実施できている。 ・部活動は休養日の確保や活動時間は順守されている。 ・時間外業務の目標時間を超えている教職員が若干名いる。	C	・週休日振替・勤務の割振を徹底する。 ・部活動のガイドラインを徹底する。 ・日直業務内容を点検し、業務の偏りがあれば解消する。

評価基準　A：十分達成（１００％）　B：概ね達成（８０％）　C：変化の兆し（６０％）　D：まだ不十分（４０％）　E：目標・方策の見直し（３０％以下）